

2012年(平成24年)9月22日(土曜日)

「労務管理の大切さについて、日本経済新聞社から」

取材を受けました。

これからも、中小企業を労務で支えることかてきるよう

努力していきたいと思っています。

村松貴通

企業の現場に通い詰めれば、見えてくるものがある――。社会保険労務士の村松貴通さん(35)は25歳のとき、浜松市内で社労士事務所を立ち上げた。ひたすら地元企業を訪問する「どぶ板営業」で経営者の信頼を得て、

静岡県
きりり人財

現在は150社と顧問契約を結ぶ。労務管理の面から企業経営を支えることで地域経済を元気にしようとして、きょうも現場を歩き回る。
ある日、村松さんの携帯電話が鳴った。「解雇通告しようとした社員が

浜松の中小、労務で支える

社会保険労務士
村松 貴通さん



人間重視の経営訴え

『クビになるなら、こちら側も覚悟がある』と断言している。助けてくれないか。顧問契約は結んでいないが、知り合いのサービス業の社長からの相談だった。
村松さんには様々な経

『クビになるなら、こちら側も覚悟がある』と断言している。助けてくれないか。顧問契約は結んでいないが、知り合いのサービス業の社長からの相談だった。
村松さんには様々な経

話し合いを重ね、円満な退社に至った。
もともと植木職人の父を持ち、幼少時代から家族や職人たちが朝から晩まで働く姿を間近に見て育った。「人の働き方」に興味を持ち、高校生の時には既に社労士になることを決意していた。大学卒業後にまず地元の信用金庫に入社し営業経験を積んだ。
信金退職後に社労士の資格を得て事務所を立ち上げたが、契約先ゼロからスタート。「泥臭くやるしかない」と腹をくくり、バイクに乗ってひたすら飛び込み営業を重ねた。その時代に合った

ひとこと

「70歳までは働き、常に現場を知っている社労士でありたい」